

日本フランス語フランス文学会

cahier

31

mars 2023

I 2022年度秋季大会の記録

ワークショップ

- 1 プレザンス・アフリケーヌとは改めて何か
中村隆之 星埜守之 佐久間寛 2
- 2 サント＝ブーヴィアーナ——作家研究からサント＝ブーヴ像を再構築する
池田潤 片岡大右
鈴木和彦 松村博史 6
- 3 Enseigner (par) la littérature dans les cours de français à l'université
Éric AVOCAT Yosuke FUKAI
Justine LE FLOC'H Marie-Noëlle BEAUVIEUX 10
- 4 La littérature et le féminicide
Aya UMEZAWA Rinpei MANO
Kyoko MURATA Marc RENNEVILLE 15
- 5 作家事典のダイナミズム
鎌田隆行 坂本千代 倉方健作 19
- 6 シャルル・フーリエをどう読むか
福島知己 大森晋輔
森元庸介 中村恭子 23

II 書評

文芸事象の歴史研究会（編）『GRIHL II 文学に働く力、文学が発する力』、吉田書店、2021年

菅谷憲興 29

ジャン＝ポール・サルトル（著）『家の馬鹿息子V ギュスターヴ・フローベール論（1821年より1857年まで）』、鈴木道彦、海老坂武監訳、黒川学、坂井由加里、澤田直訳、人文書院、2021年

山崎 敦 32

高橋純（著）『高田博厚＝ロマン・ロラン往復書簡——回想録『分水嶺』補遺』、
吉夏社、2021年

吉川一義 34

松澤和宏、小倉孝誠（編）『フローベール 文学と〈現代性〉の行方』、水声社、
2021年

寺本弘子 36

Teppei ASAMA, *Proust et les amateurs*, Classiques Garnier, « Bibliothèque proustienne »,
2020.

小黒昌文 39

Taro NAKAJIMA, *Entre croyance et savoir. Les Figures religieuses de Flaubert*, Presses
Universitaires de Strasbourg, 2021.

金崎春幸 41

I 2022年度秋季大会の記録

特別講演

Génétique de Mme Arnoux dans L'Éducation sentimentale

Éric LE CALVEZ (Georgia State University (Atlanta))

司会 大鐘敦子 (関東学院大学)

in *LITTERA* n° 8, mars 2023

ワークショップ1

プレザンス・アフリケーヌとは改めて何か

コーディネーター・パネリスト：中村隆之（早稲田大学）

パネリスト：星埜守之（東京大学），佐久間寛（明治大学）

本ワークショップのタイトルには二つの意味が込められていた。何よりも、「プレザンス・アフリケーヌとは何か」である。その名辞を知ることはあっても、それが何を指すのかは自明ではない。そうであるならば、プレザンス・アフリケーヌをめぐる6年間の共同研究を実施してきた主要メンバーである本パネリストたちの役目は、まず第一に、本学会員に「プレザンス・アフリケーヌ」なるものがこれまで何を意味してきたのかを伝えることにあった。その上で、今一つ本ワークショップで考えなければならなかったのは、それが「改めて何か」という今日性に結びついた問いかけである。

当日のパネリストの役割と進行を記しておく。司会および本共同研究のプロジェクトの概要説明は星埜守之が務めた。続いてプレザンス・アフリケーヌをめぐる概略については、中村隆之と佐久間寛がそれぞれ報告した。これらの報告を受けて、両者のあいだでコメントの補足を行ない、その後は会場に開いて質疑応答を実施した。

以下、本共同研究プロジェクトの概略と、中村および佐久間による当日の報告の概略を記しておく。なお、以下に記すものは、当日実施した内容の正確な再現というよりも、本ワークショップを紙面で再現するにあたり、適度なアレンジを施したものであることをお断りしておく。また佐久間の報告部分は本人が記し、それ以外の文章はコーディネーターによる。

*

本共同研究プロジェクトの概略

プレザンス・アフリケーヌをめぐる共同研究は2015年度から2020年度にかけて実施された3年2期、合計6年におよぶプロジェクトである。本プロジェ

クトは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を拠点に実施され、毎年2回から3回の研究会を重ねながら、1947年に創刊された雑誌『プレザンス・アフリケーヌ』をめぐる基本知識と理解を深めることをまずは目指した。

共同研究員は学際的メンバーで構成されたが、主な研究分野は、文学と人類学である。互いに異なるフィールドを横断し、相互に刺激を与えながら研鑽していくことに本研究の醍醐味はあった。本共同研究の主要な目標は、プレザンス・アフリケーヌをめぐる国際シンポジウムを実施することだった。2017年、すなわち雑誌刊行70周年に東京外国語大学で行なった3日間の国際シンポジウムには、基調講演に同雑誌の編集長ロミュアル・フォンクア氏を迎えた。また同シンポジウム開催の立役者であるアジェ・セレストン・ロモ・ミヤジオム氏の多大な貢献により、2019年にストラスブール大学でも同種のシンポジウムを実施し、国際的な研究交流を深めることができた。

本共同研究の成果は、何よりも、2017年の東京シンポジウムの報告のなかから選ばれた原稿を収録した『プレザンス・アフリケーヌ』第198号の特集号(2020年)である。さらに個人の成果物としては、佐久間による『プレザンス・アフリケーヌ』のインデックス(1947-2016)の同出版社からの上梓(2021年)が著しい成果である。

このようにフランス語での成果物を出版する一方、日本語での共同研究の成果としては、日本アフリカ学会の学会誌『アフリカ研究』におけるプレザンス・アフリケーヌ特集の実施(2018年)が挙げられる。さらに、同誌の主要論考の翻訳およびその解説を中心とした、いわばプレザンス・アフリケーヌ・リーダーにあたるものを岩波書店より2023年度中に出版する計画である。

*

中村報告

エコール通りに所在する小さな書店や、ドゴンの仮面をあしらったロゴで知られるプレザンス・アフリケーヌは、フランスにおける出版メディアとして捉える場合には、いかにも老舗の小出版社の趣である。しかしまずは雑誌として1947年に始まったプレザンス・アフリケーヌは、創刊以来、フランス語圏のアフリカ系文化の主流を文字通り形成していった巨大なメディアにして莫大な遺産だと一般に捉えられる。この雑誌・出版の運動体はその出発点においてフ

ランスからの脱植民地化を文化面で達成することを目指した。そのさい、アフリカ系知識人にとって大きな思想的典拠となったのがパン・アフリカニズムに連なるネグリチュード運動である。ネグリチュードは黒人意識を通じてブラック・ディアスポラの紐帯を水平的かつ垂直的に形成していった。エメ・セゼールの『帰郷ノート』『植民地主義論』とともにプレザンス・アフリケーヌ刊行物の古典的著作であるシェイク・アンタ・ジョップ『ニグロ諸国民（民族）と文化』は、マーティン・バナルの『ブラック・アテナ』（1987年）にはるかに先立つ1954年にエジプト文明の黒人起源説を唱えたものだ。このようにプレザンス・アフリケーヌにとっての初期の闘争の局面は、フランス語という宗主国の言語空間のなかにアフリカ文化の領域を形成することにあつた。この文化領域の形成が政治面での脱植民地化に向かう大きな転機と捉えられるのが、雑誌『プレザンス・アフリケーヌ』新シリーズ1・2合併号から事実上始まる「国民詩（民族詩）」論争である。この論争により、アフリカ系の詩人は、植民地主義を争点とする政治的連帯を可能としてきたフランス共産党と距離をとり、自分たちに固有の文化と政治の地平を目指すようになっていく。事実、1956年、セゼールは共産党書記長に宛てた公開書簡で離党し、その先頭を進んだ。しかし、政治面での脱植民地化は、それが政治である以上、諸力学が働く複雑なプロセスを経る。ネグリチュードはアフリカ人学生世代から支持を失い、輝かしく見えた独立もその多くは宗主国フランスとの政治的妥協の産物と化すなど、実態は理念とかけ離れた。しかし人が絶望できるのは、今より良い世界があることを望んでいるからだ。プレザンス・アフリケーヌにおけるその理念に向けた文化的営為は今でも参照され続け、読み継がれている。このようにこのメディアはフランスにおけるアフリカ系文化を語る上で現在でも基本的参照項である。

佐久間報告

かつてアフリカは、文明の発展に寄与するものがない、文化も歴史も不在の暗黒大陸として西欧に想念されていた。こうした不在の言辞に抗する運動は、まず、ネグリチュードをはじめとした文学の領域において実現されたが、この運動を展開するためのアフリカ独自の媒体として創始されたのが雑誌『プレザンス・アフリケーヌ』だった。当初は穏当な文化誌として出発した同誌は、やがて反人種主義・反植民地主義を標榜する政治誌としての色彩を強めていった。

とりわけ同誌は、1955年にバンドンで開催されたアジア・アフリカ会議に呼

応する形で二度にわたり黒人作家芸術家会議を主催した（1956年フランス・パリ、1959年イタリア・ローマ）。これらの会議にはアフリカ、カリブ、北米から世界的な黒人知識人が集結し、文学をはじめとした文化活動による政治的解放のヴィジョンが打ち出された。こうした会議の実現を可能にしたのは、『プレザンス・アフリケーヌ』誌を媒介として形成された国際的な黒人知識人のネットワークだった。

さらに黒人作家芸術家会議における決議をふまえて、アフリカ諸国独立後には二度にわたり世界黒人芸術祭が開催された（1966年セネガル・ダカル、1976年ナイジェリア・ラゴス）。一握りの知識人の手による黒人作家芸術家会議に対し、数万の一般民衆が来場した世界黒人芸術祭は、アフリカ文化運動史上、ひとつの画期といえる出来事だった。とはいえ、これらの祭典はいまや主権国家となった新興アフリカ諸国によって国家事業化されたがゆえに、文化を通じた政治的解放という『プレザンス・アフリケーヌ』のヴィジョンからは乖離していった。文化運動体プレザンス・アフリケーヌの凝集力は植民地体制の離脱の局面において最高潮に達し、あらたな国民国家体制に取り込まれる局面において退潮したのだった。

しかし、だからといって文化を通じた政治的解放というヴィジョンそのものが価値を失ったわけではない。プレザンス・アフリケーヌは不在とされたアフリカの文化を構想する企てであるばかりか、文化構想を可能にする媒体を創造する企て、しかもこの表現媒体をアフリカ化する試みだった。それは一握りの知識人による文化専有の企てではなく、むしろ知識人を表現媒体としてアフリカ民衆の声を世界に轟かせようとする企てだった。アフリカ化とは、国有化でも国家化でもなく、「民衆化」の企てだった。

こうしたプレザンス・アフリケーヌの思想は、新自由主義の思潮の下、国有企業の「民営化」と政治の「民主化」を経たとされるアフリカ諸国の現在を民衆化という観点から批判的に再考する契機となりうるのではないだろうか。

*

このようにプレザンス・アフリケーヌとは「改めて何か」と問うことは、この運動体の研究を通じて明らかにされ、深められていく。その意味でも、当日、会場での議論に加わってくれた本共同研究の関係者、さらにアルジェリア戦争に対する黒人知識人の立場表明の有無について、プレザンス・アフリケーヌに

とっての「イスラエル／パレスチナ問題」をめぐる鋭い問いかけを投げかけてくださった参加者の先生方にこの場を借りてお礼申し上げる。そして、2時間という長丁場にもかかわらず、私たちのワークショップに耳を傾けてくださった32名ほどの参加者の皆様に改めて感謝申し上げます。

ワークショップ2

サント＝ブーヴィアーナ——作家研究からサント＝ブーヴ像を再構築する

コーディネーター：池田 潤（白百合女子大学）

パネリスト：片岡大右（東京大学）、鈴木和彦（明治学院大学）、松村博史（近畿大学）

池田 潤（白百合女子大学、コーディネーター）

文学史には必ず登場し、その作品や「理論」は現在でもしばしば言及されるのに、実際に手にとって読まれることはあまりない、サント＝ブーヴはそうした文筆家のひとりである。とくに日本では、その著作を書店で見かけることはできないといっていい。「近代批評の祖」という位置付けに見合わないこの不遇は、もっぱらその伝記批評的アプローチが、古くさい、妥当性の低いものとみなされていることによるだろう。そして、この評価が定着してしまうのに象徴的な役割を果たしたのがブルーストの「サント＝ブーヴに反論する」であることも、まさに文学史的常識に属する。

ところが、ブルースト研究の視点からサント＝ブーヴの文章を読むと、注意を引くのは、両者の対立よりはむしろいくつもの点での親和性である。実は、このこともすでにひとつの常識になっており、フランスで復刊されたサント＝ブーヴのエディションは揃ってブルーストの未発表評論を相対化している。

代表的な批判を提起した者がその実同じ立場に立っているような「近代批評の祖」とは、一体何者なのか。その再検討は、近代批評そのものを問い直すこ

とでもあるだろう。

ひとつの中心的論点は、「サント＝ブーヴ流の伝記批評」という神話についてである。「この木にしてこの実あり」はサント＝ブーヴ自身が繰り返し提示した「理論」だが、ではその「実」とは何かということまで問うならば、目指されている対象は 20 世紀の批評諸理論のそれと本質的に違わないのではないかという印象がごく素朴に生じる。その印象は実証可能だろうか？認めなければならないのは、サント＝ブーヴを読むのにかかなりの困難がともなうことだ。文字通り万巻の書がその批評対象であり、かつ議論はしばしば専門的である。それに加えて、サント＝ブーヴの悪名高いジャーナリスト的順応主義を相対化する必要がある。

それゆえ、この仕事には共同作業が効果的だ。サント＝ブーヴが批評の対象とした作家の専門家であれば、作家の受容史においてサント＝ブーヴの批評がどのような位置付けをされるべきかということを作家研究の現在地点から見定めることが可能だろう（これはまた、視点を逆にすれば、サント＝ブーヴをハブにして作家研究どうしをつなぐ回路を構築する仕事でもある）。モザイクのようにではあれ、現在の仏文研究の水準において「近代批評の祖」の姿を再構築することには、専門的研究においてのみならず一般の読書界に寄与するところも大きいだろう。多くの人の協力を乞う。

片岡大右（東京大学）

シャトーブリアン研究の見地からサント＝ブーヴについて論じるにあたり、批評家のロマン主義一般との関係を確認するならば、まず指摘しておくべきは、早い段階でロマン主義（少なくともフランスロマン主義）への彼の気持ちは冷めていたのだ、ということである。そしてサント＝ブーヴは、その後も、何らかの流派にコミットすることはなかった。むしろ、つねに両義的であるということが彼の一貫した立場であったとすらいえる。

したがって、シャトーブリアンが槍玉にあげられるのは、まさに彼が正統的なロマン主義者であるがゆえのことなのだ（シャトーブリアン生前にはかなり気を遣っていたサント＝ブーヴだが、没後ただちに容赦なく筆をふるうようになったというのはこの批評家に特徴的なことではある）。サント＝ブーヴは、シャトーブリアンが造形した代表的人物にしてロマン主義の象徴でもあるルネを危険人物とみなしていた。

サント＝ブーヴのこうしたシャトーブリアン評に対立する軸を代表するのはシャルル・モーラスで、彼のようにシャトーブリアンを穏当な保守主義者ととらえる見方は現在まで続いている。

だがそもそも、シャトーブリアンも含めたフランスロマン主義が参照し理想化した「古いフランス」および「新しいフランス」が、かなりの程度虚構の産物というべきものだったのだとすれば、サント＝ブーヴはその両義的で煮え切らない姿勢によってそれらのはざまに自らを位置付けていたといえるが、そのこと自体がまた、フランスロマン主義の危うさを示しているのである。

鈴木和彦（明治学院大学）

サント＝ブーヴの詩の特徴として目をひくもの、それは「小ささ」である。それは主題についてと同様、形式についてもいえる。

まず主題について、サント＝ブーヴははっきりとした意志を持って卑小なものを選ぶ。それはみずからを遅れてきた詩人と認識しているがゆえのことであり、シャトーブリアン、ユゴー、ラマルチーヌといった偉大なロマン派詩人たちが歌い上げた広大な風景と精神の深淵から彼はすすんで背を向ける。象徴的なモチーフは「刈り取られた畑」だ。サント＝ブーヴが立っているのは、すべてが書かれてしまった後の地点、もはや歌うべきものが何も残っていない場所である。それはもちろん彼の本意ではないかもしれず、強いられて選ばされた位置なのではあろうけれど、それがその時代の詩が置かれた状況であるという認識には明確な批評性があるし、またそれでもなお詩を書くという実践にはひとかたならぬ矜持をみることができる。

次に形式についていえるのは、サント＝ブーヴが、フランス近代詩を短くするのに貢献したということだ。ロマン派の詩は、しばしば途方もなく長い。それに対してサント＝ブーヴが称揚しかつみずから実践するのがソネットの形式だ。その後のフランス詩におけるソネットの流行については言うまでもないだろう。

また、サント＝ブーヴの詩に関しては、ジョアシャン・デュ・ベレーへの傾倒も特徴的である。自国の過去の文物を参照するのは典型的なロマン派の作法ではあるが、この選択には上述の点との一貫性を指摘できる。すなわち、デュ・ベレーとは「ロンサールにはなれなかった詩人」なのだ。サント＝ブーヴは、彼が扱うのが「小さな主題」であったこと、またソネットを書くのにすぐれて

いたことをとりあげてこの詩人を評価している。

松村博史（近畿大学）

バルザックは複数回にわたりサント＝ブーヴの批評の対象となり、またそこに同時代人どうしとしての確執もあった。その批評はプルーストによって「サント＝ブーヴに反論する」で大きくとりあげられる。三者の間にはどのような理解と誤解の位相がみられるか。

1834年に発表されたサント＝ブーヴのバルザック評は、プルーストによってこきおろされているものの、流行作家として頭角を現した作家の分析には現代のバルザック研究の水準に照らしても的確な指摘が少なくない。この作家が女性の内面を細かに描いたということ、また地方生活、さらには私生活を「発見」したという点を挙げているのは慧眼といえる。サント＝ブーヴは斜に構えたような姿勢をとっており、バルザック作品を「奇妙で矛盾した混濁」と評しているのだが、それさえも、現代ではまさに作家の魅力として語られる特質であるということは興味深い。

批評家がバルザックと明確に対立する立場をとるのは「産業文学論」においてだ。バルザックは、作家がその仕事に見合った報酬を与えられるべきだと主張していたが、サント＝ブーヴはそれとは逆に、文学の営みを無償の行為として理想化していた。この対立関係は、著作権の歴史の上で重要な軸となっている。

1850年のバルザック死去に際して、サント＝ブーヴはより落ち着いた筆致のバルザック評を発表しているが、必ずしもバルザックを賞賛してばかりというわけではなく、依然としてこの作家への批判的姿勢は残っている。難癖のついたところが現代ではまさにバルザックの才能の表れとして評価されているのも1834年の批評と同様である。

バルザックの「欠点」をあげつらうのは、実はプルーストにも共通している。そのバルザック評はサント＝ブーヴのそれよりも容赦がない面があり、作家は「卑俗」と言い切ってしまわれている。しかしプルーストの論理、あるいは洞察の独創は、その評価を一気に逆転させてしまうことにある。曰く、人はまさしくその欠点ゆえにこそバルザックを愛読するというのだ。プルーストとサント＝ブーヴは、評価の仕方は違えど、同じところに目をつけている。

現代では、バルザックとプルーストがフランス文学の代表的作家として「権

威」になり、サント＝ブーヴは逆に嫌われ者ようになってしまった。ただ、評価は変わってしまっても、文学や作家をめぐる理解と誤解が、権威や常識の位相のうちにあるという構造は当時も現代も同様であろう。

ワークショップ3

Enseigner (par) la littérature dans les cours de français à l'université

コーディネーター・パネリスト : Éric AVOCAT (Université d'Osaka)

パネリスト : Yosuke FUKAI (Université du Tohoku) , Justine LE FLOC'H (Université de Kyoto) , Marie-Noëlle BEAUVIEUX (Université Meiji Gakuin)

Cet atelier s'inscrivait dans le prolongement de celui que les mêmes intervenants, rejoints cette année par Justine Le Floc'h, ont présenté lors du Congrès d'automne 2021, à l'initiative de Marie-Noëlle Beauvieux, afin de mettre en évidence les bénéfices multiples que procure l'intégration de la culture littéraire aux enseignements de langue française dans les universités. Nos réflexions portaient cette année sur l'articulation entre l'étude des textes pour eux-mêmes (enseigner la littérature), et l'usage de ce matériau à des fins plus larges, de la maîtrise de la langue à une compréhension fine des cultures et des sociétés francophones (enseigner *par* la littérature).

La lecture en groupe - Mise en place du choix Goncourt du Japon

Yosuke FUKAI

L'année dernière a été créé le choix Goncourt du Japon. Ce projet réunit un jury d'étudiants pour choisir un roman parmi quatre livres de la sélection du Prix Goncourt. Mon intervention a porté sur la mise en place de ce projet dans le Nord du Japon sur l'année universitaire 2022-2023.

Deux réunions de lecture ont été créées. *Le Voyant d'Étampes* et *La plus secrète mémoire des hommes* ont été lus pendant un cours de français d'approfondissement de l'Université du Tôhoku. *S'adapter* et *Enfant de salaud* ont été lus par un autre groupe composé d'étudiants de l'Université du Tôhoku et de l'Université d'Hokkaidô. Pendant deux heures environ, chaque semaine, ils ont lu en français un passage de chaque œuvre.

Pour aider ces étudiants dont le français était, pour beaucoup, une simple option dans leur cursus, deux groupes de travail composés exclusivement d'étudiants ont été créés pour préparer la lecture. Dans une ambiance détendue, favorable à l'interaction, les étudiants ont pu échanger de manière plus animée, ce qui a nourri efficacement les réunions de lecture.

Tout le travail a été préparé par tous à l'aide de documents en ligne qui centralisaient les textes étudiés ainsi que les informations recherchées par les étudiants et leurs questions. La lecture détaillée a permis de saisir la profondeur des œuvres en induisant des discussions sur le style propre à l'original français, tandis que les synopsis préparés par l'organisation du choix Goncourt du Japon donnaient les informations nécessaires sur les passages non lus.

Chaque réunion a fait l'objet d'un compte-rendu détaillé, puis les étudiants ont choisi dix critères pour évaluer les œuvres. Cette expérience de lecture partagée leur a donné à la fois le goût de la littérature française et l'expérience d'un travail de groupe nécessitant organisation et communication, mais procurant aussi un espace d'entraide, de partage d'émotions et de lien. En tant que professeur, j'espère que ce projet continuera longtemps à rassembler beaucoup d'étudiants, et qu'il sera l'occasion de faire renaître l'intérêt pour la littérature française au Japon.

Peut-on vraiment enseigner le loisir de lire des livres ? La lecture intégrale dans la didactique de la littérature en France

Justine LE FLOC'H

En France, d'après les programmes de français de l'Éducation nationale, les enseignants de la maternelle jusqu'au lycée ont pour mission d'initier les élèves aux codes et usages des livres et de développer leur plaisir de lire. À l'université, les enseignements de lettres sont souvent pensés autour d'une ou plusieurs œuvres

intégrales dont la lecture est requise avant le début du semestre. Le CECRL de 2018 réserve lui aussi une place spécifique à la lecture, notamment dans l'échelle « Lire comme activité de loisir », qui introduit les romans dès le niveau B2.

Face à la difficulté de répondre à cet idéal, les enseignants de lettres modernes en France tentent de trouver des stratégies didactiques. Certaines stratégies portent sur le corpus : aux côtés des œuvres traditionnellement prescrites, celles de Racine, Flaubert, Sartre, apparaissent des auteurs et autrices qui seraient davantage susceptibles de correspondre aux préoccupations et convictions des élèves, et qui relèvent souvent de la littérature contemporaine ou francophone, tels qu'Annie Ernaux, Ahmadou Kourouma ou encore Delphine de Vigan.

Une autre stratégie consiste à renouveler les activités pédagogiques proposées aux élèves. Les « écrits d'invention » les conduisent par exemple à jouer en classe le procès d'Antigone ou à créer un magazine people à partir d'*Andromaque*. Les « écrits d'appropriation » peuvent quant à eux prendre la forme d'un carnet de bord qu'ils remplissent au fur et à mesure de leurs lectures, ce qui leur permet d'entretenir leur motivation.

Enfin, une autre stratégie consiste à utiliser les réseaux sociaux comme des médiateurs. Les élèves peuvent créer une page Facebook pour un personnage de roman ou encore enregistrer des podcasts, voire tourner des vidéos YouTube, dans lesquelles ils font le compte-rendu d'une lecture à l'intention de la classe. Ces enseignants transmettent ainsi le « plaisir de la lecture », mais celui-ci est déplacé, puisque le plaisir ne provient plus tant de l'œuvre dont ils sont lecteurs que de l'activité dans laquelle ils sont pleinement créateurs.

Du conte pour (ré)apprendre à lire - Essai d'initiation à l'analyse littéraire par les Contes et histoires du temps passé de Charles Perrault (1697)

Marie-Noëlle BEAUVIEUX

Que peut apporter l'étude des contes de Perrault à des étudiantes et des étudiants dont le français est en cours d'acquisition ? Les contes sont à la fois des histoires universelles et des œuvres littéraires originales. Cette double nature fait leur difficulté, mais aussi leur intérêt dans le cadre d'un cursus qui conjugue à la fois études aréales et littérature.

Tout d'abord, il faut noter que les contes donnent accès à un univers culturel et linguistique singulier. Ils permettent d'appréhender efficacement certaines spécificités de l'histoire culturelle française du XVII^e siècle sur les plans politique, social et civilisationnel. Plus largement, ces « contes-de-Perrault » mettent en scène toute une culture littéraire et linguistique parce qu'ils sont faits d'intertextes, comprenant des œuvres classiques ou contemporaines mais aussi des proverbes et des expressions toujours en usage aujourd'hui. Ils peuvent enfin ouvrir, au-delà du XVII^e siècle et de la langue française, vers les textes du folklore et vers d'autres aires culturelles.

Cependant, les contes de Perrault sont aussi un matériau idéal pour introduire l'analyse littéraire. Les notions de genre littéraire et d'horizon d'attente peuvent être expliquées à l'aide du frontispice pour apprécier la complexité de l'entreprise de Perrault, laquelle a consisté à faire d'un genre oral un genre véritablement littéraire. L'écriture elle-même repose souvent sur des bizarreries grammaticales ou des figures de style simples comme l'hyperbole ou la métaphore, qui sont facilement identifiables. Elles offrent des pistes interprétatives stimulantes pour comparer le contenu des contes avec celui des moralités, souvent dissonants.

Quant à la difficulté de la langue, les textes étant courts, et chaque conte ayant des particularités syntaxiques propres (phrases simples ou complexes, discours direct ou rapporté, utilisation répétée de structures comparatives, de propositions consécutives...) on peut proposer des exercices de lecture reposant sur la discrimination de l'importance des groupes grammaticaux de la phrase pour donner un accès direct au texte original sans passer par la traduction. L'utilisation d'éléments non textuels (illustrations, adaptations filmiques...) dans l'interprétation des contes eux-mêmes reste à explorer.

Comment bien trahir les images

Éric AVOCAT

Que les images offrent une ressource pédagogique de premier ordre, cela n'est pas à démontrer. Une question plus vivement débattue est de savoir si ce mode de représentation forme un langage, s'il peut faire l'objet d'une *lecture*, comme les instructions de l'Éducation nationale y invitent. L'hypothèse est heuristique : elle permet de faire circuler et fructifier, entre culture visuelle et culture littéraire, une attention

aiguisée au travail de composition et de signification.

Écartant la fonction illustrative de l'image, la règle méthodologique sera tirée du célèbre tableau de Magritte, *La trahison des images*, qui, à la négation près (« Ceci n'est pas une pipe »), pourrait figurer dans un manuel pour débutants. L'orientation du travail est donnée par le jeu du génitif subjectif (les images nous trahissent, simulacres, leurres, trompe-l'œil) et du génitif objectif (l'image est trahie par sa légende) : les images tirent leur énergie de leurs déplacements (*tradere*), qui modulent la trahison, mauvais traitement de l'objet, par le pouvoir de révéler, de mettre à nu une vérité insoupçonnée. L'enjeu est de *bien* trahir, comme l'enseignent les titres énigmatiques ou facétieux de Magritte.

À titre d'exemples, interrogeons quelques photographies de Cartier-Bresson à la lumière du concept d'*instant décisif*, que l'on peut introduire par le conditionnel passé contrefactuel : s'il n'avait pas déclenché son objectif, qu'aurait-il, qu'aurions-nous, manqué ? C'est souvent une histoire de croisements de trajectoires et de rimes visuelles. Palerme, 1972 : au premier plan, deux enfants courent après une roue (de Fortune), tandis qu'à l'arrière-plan, un corbillard est immobilisé dans un embouteillage – le cliché hiératique de la Sicile endeuillée, son *négatif* cinétique. Athènes, 1954 : deux « petites vieilles » (Baudelaire) passent à la verticale de deux cariatides, la beauté *altière* de la Grèce mythologique surplombe l'*humble* décrépitude contemporaine – « je hais le mouvement qui déplace les lignes » (*Ibid.*).

De l'image visuelle à l'image poétique, le pas est tracé par les *Calligrammes* d'Apollinaire. « Mon cœur pareil à une flamme renversée » : l'*évidence* du signe graphique sert de substrat aux médiations rhétoriques (métaphore, syllepse, synecdoque) qui articulent un discours sur la passion.

La littérature et le féminicide

コーディネーター・パネリスト：梅澤 礼（富山大学）

パネリスト：村田京子（大阪府立大学名誉教授），真野倫平（南山大学），マルク・レンヌヴィル（CNRS）

本ワークショップでは、文学と歴史を専門とする日仏の研究者が、それぞれの立場から文学とフェミサイドについて論じた。

19 世紀フランス文学におけるフェミサイドのテーマ

村田京子

本発表では、バルザック、ジョルジュ・サンド、ゾラの小説を通して、フェミサイドのテーマが文学作品の中でどのように扱われているのかを探った。『金色の眼の娘』（1834）と『ランジェ公爵夫人』（1834）には、バルザック自身のオリエントの夢が投影されている。両作品において、オリエントの暴君特有の全能の力を持つ主人公は、「絶対的な主人」として、恋人の裏切りを罰するために暴力を振るい、その命も自由に処することができた。さらに、恋人の暴力的行為に直面したランジェ夫人が、コケットな女性から「真の愛情」に目覚めた女性に変貌するように、女性は男の力を称賛し、その暴力を喜んで受け入れるとみなされている。しかし、それは作者を含めた男のファンタスムに過ぎない。その証拠に、サンドの『アンディヤナ』（1832）では、女主人公は夫の暴力を「犯罪」とみなし、男性優位の社会を激しく非難している。

ロマン主義文学では、フェミサイドのテーマはエグゾチックなニュアンスを帯びているが、自然主義文学では、このテーマはより現実に近づき、三面記事に題材を取った作品が多く出現する。ゾラの『獣人』（1890）がその顕著な例である。この小説には様々な動機を持つ犯罪者が登場する〔激情犯罪（crime passionnel）（ルポー）、強姦（グランモラン）、金目当ての犯罪（ミザール）、「遺

伝的な裂け目 (fêlure héréditaire)』による犯罪 (ジャック・ランチエ)」。彼らは、男の心の奥底に潜む「獣」によって暴力や殺人に駆り立てられていた。ロンブローゾの『犯罪者論』の影響を受けたこの小説では、ジャックは「生来犯罪者 (criminel-né)」の身体的特徴を持つが、部分的でしかない。「生来犯罪者」像に完全に当てはまるカビューシュの方が無実の罪で処罰される。ジャックが殺害衝動に駆られるのはむしろ、女性が男の欲望の対象から欲望の主体となった瞬間である。そこにはセクシュアリテを帯びた女に対する作者自身の恐怖が見出せる。このように、ゾラは三面記事や当時の医学的理論を参照しながらも、彼独自の考えに基づいて物語を構築していた。したがって、19世紀フランス文学におけるフェミサイドのテーマは、女に対する男の欲望と恐怖、女への支配欲を軸に展開されていると言えよう。

グラン＝ギニョル劇とフェミサイドの美学

真野倫平

本発表では、グラン＝ギニョル劇におけるフェミサイドの審美化について考察した。リディ・ボディウとフレデリック・ショヴォーが指摘するように、女性殺しは古くから存在するが、フェミサイドという概念は近年のものにすぎない。19世紀後半以降、新聞は売り上げを伸ばすために数多くの女性殺しを三面記事として取り上げたが、フェミサイドを問題視することはなかった。このようなメディアのあり方は今日でもあまり変わっていない。イヴァン・ジャブロンカは『歴史家と少女殺人事件』で近年のフェミサイド事件を分析し、メディアのセンセーショナリズムを批判した。さらに『公正な男性』で女性蔑視の問題を掘り下げ、女性を貶める文化的なステレオタイプの存在を指摘した。

19世紀末に誕生したグラン＝ギニョル座は、フェミサイドをドラマの主要な題材として取り入れた。劇場の創設者オスカル・メテニエは『あいつだ!』において、娼家を舞台に男性殺人犯の娼婦に対する暴力を描いた。やがて恐怖演劇の専門劇場と化したグラン＝ギニョル座は、「世界で一番殺された女」看板女優マクサの姿を通じて、フェミサイドの審美化を押し進めた。ピエール・シェーヌ『責苦の園』はその好例であり、観客がヒロインの断末魔を心置きなく堪能できるように設計されている。

それでは、グラン＝ギニョル劇にフェミサイドの美学に抗うような作品は存

在しないのだろうか。ウジェーヌ・エロとレオン・アブリクのコメディ『未亡人』は、グラン＝ギニョル座を思わせる犯罪博物館を舞台に、死の光景に性的興奮を覚えるヒロインを描いている。そこでは男性と女性の役割が逆転され、ヒロインが瀕死の男性の姿を鑑賞する姿がカリカチュア的に示される。同作は男勝りのヒロインを滑稽視するものとも解釈できるが、その侮蔑的な視線はグラン＝ギニョル座の観客自身に跳ね返ってくるのであり、そのかぎりでフェミサイドの美学そのものを問題視しているとも考えられる。

「口づけのなかで死ぬ」ーフェミサイドの原型？ー

マルク・レンヌヴィル

フェミサイドとは、女性を女性であるという理由で殺害する行為である。とくに19世紀、これは「激情」犯罪と混同された。死へと行き着く愛としては心中もあげられるが、そこには被害者同士の同意がある。だが片方が生き残っていた場合、それは殺人を犯すうえでの最良の言い訳にもなる。フェミサイドとの関連が疑われるのは、亡くなったのが女性だった場合である。

1888年1月25日、アルジェリアのコンスタンティーヌで、既婚女性が撃たれて死亡し、若い恋人が生き残った。彼が言うようにこれは心中未遂なのか、それとも被害者の夫が考えるように心中を装った殺人なのか？ 駆け出し作家でもあったこのシャンビージュについて、ある者はサンドやスタンダールやバルザックやヴィニーを読んで墮落した、過敏で想像力の過剰な理想主義者だと言った。またある者は、愛してくれると思ったのに拒絶した女性に我慢できなかった恥知らずだと言った。被害女性の方はといえば、夫を裏切った罪人であり、みずからの死の欲望によって不貞に値する結末を迎えたのだとされた。裁判所は殺人と判断したが、刑は軽いものだった。

事件を受けてブルジェは『弟子』を執筆、文学や心理学理論に影響される若者の問題を明らかにした。A・フランスやパレスも立場を表明し、オンセーは『ジャン・ビーズ』(1889)、ジープは『落伍者』(1891)、ブリュラは『さまよえる魂』(1892)を発表した。事件に着想を得た連載小説もあった。どの物語でも激情、致命的な愛、女性のイメージ、生き残った男性の責任が問われた。1889年1月30日のオーストリア＝ハンガリー帝国皇太子と愛人の死によっても議論は長引いた。愛の名のもとで女性を殺す「シャンビジスム」が見られる

事件も起こった。

1950年代以降忘れられつつあったシャンビージュ事件が再び注目されるべきなのは、文学とフェミサイドの歴史において特殊な位置を占めているからである。事件は社会的エリートや法曹界に波紋をひろげた。作家、犯罪学者、科学者らは、自分たちの価値と知識をそこに見出そうとした。マイヤーリンクの悲劇の影響もあるが、心中という解釈がためらわれ、覆される可能性を示す事件だった。ときに乱暴な見解が生み出され、ある犯罪のイメージが正当だと思われていたことが暴かれた。何より事件は、女性殺害に対する反応、まだフェミサイドという名で呼ばれていなかった行為がはじめて認識されたようすを見せてくれるのである。

シャンビージュ事件（1888）と「激情犯罪」

梅澤 礼

レンスヴィルが紹介した事件に関連し、本発表は生き残った男性の作家仲間たち（シャンビジスト）に注目した。事件の翌年ブルジュが発表した『弟子』では、女性は殺されるのではなく自殺する。ブリュラの「シャンビージュ：友による記録」では、三十女に誘惑される若者が描かれた。釈放後すぐにシャンビージュが『フィガロ』に寄稿できたのは、親友マルタン＝ラヤのおかげである。とくにバルザックの『三十女』が引き合いに出されたのは興味深い。さまざまな物語の寄せ集めであるこの作品で、女主人公は、誘惑を退ける妻や男性社会の犠牲者といったいくつもの顔を持つ。そのなかで「罪ある母」にしか注目されなかったことは、シャンビジストたちの見方が部分的で表面的であることを皮肉にも物語っている。こうした、被害女性を非難し加害男性を擁護する風潮にベルジュラは警鐘を鳴らした。「女性は殺されるべきではない、いかなる場合でも、いかなる罪によっても、いかなる口実でも、いかなる国においても。」しかしこの種の犯罪はその後、激情犯罪 *crime passionnel* と呼ばれるようになった。犯罪の原因は、加害男性が被害女性から受けた苦しみにあるということになる。

20世紀に入り、犯罪学者ド・グレーフは、激情犯罪者の仮釈放があまりに簡単に認められていることに愕然とした。加害者に寄せられる好意は、被害者が代表する女性というものに対する男性たちの敵意の表れであり、それ自体犯罪

を誘発するように彼には思われた。ブルデューもまた 20 世紀が終わる前、男性の暴力性が女性への恐怖によるものである可能性を指摘した。2010 年代、『リベラシオン』紙は激情犯罪という言葉の使用に反対し、政治家ラザールは司法分野でのフェミサイドという言葉の使用を求めた。そして昨年、歴史家ボディウとショーヴォーは『激情犯罪は存在しない』と題する冊子を出版した。

だが言葉は変わっても本質は変わらない。加害者が男性で被害者が女性であるとき、加害者に理由が、被害者に落ち度が探される社会において、19 世紀のシャンピージュ事件は今日性を保ち続けている。

発表に続く 15 分間の質疑応答では、新語の持つ意味や影響力、かつての刑法 324 条などについて質問が上がり、文学と歴史の観点から議論が交わされた。

現在フェミサイドについては、世界中で支援や法改正が求められている。問題が深く社会に根づいていること、さまざまな観点から研究されるべきであることを示した本ワークショップが、その理解と予防に貢献することを願っている。

※本ワークショップの記録は *Criminocorpus* に掲載が決定した。

ワークショップ5

作家事典のダイナミズム

コーディネーター・パネリスト：鎌田隆行（信州大学）

パネリスト：坂本千代（神戸大学名誉教授）、倉方健作（九州大学）

近年、作家事典を中心とした文学事典の編纂が盛んである。1990 年代半ば以降、オノレ・シャンピオン、クラシック・ガルニエ、ブロンなどの有力出版社を中心に相次いで刊行が続いており、この「事典の時代」は、『ロマンティスム』第 186 号掲載の特集が示すように、それ自体一つの研究トピックになりつつあ

る (É. REVERZY et J.-D. EBGUY, « L'ère du Dictionnaire », *Romantisme*, n° 186, 2019, p. 129-152)。同特集によれば、この事典ブームの背景には、1) 近現代の文学研究の蓄積によって作家に関する基本情報が既に一定の高い水準に至っていること、2) ここ数十年の文学理論の退潮に伴う歴史重視の姿勢への回帰により、作家に関する各種事項への関心が再び高まってきたこと、が挙げられている。すなわち、文学研究がかつての激変の時期 (相次ぐ新資料の発見、解釈や方法論の大胆な刷新) を経て現在では安定的なフェーズに入ったことを前提とし、研究情報の整理統合を試みている実践と言える。

これを踏まえた上で、このような事典には既存の情報の集積だけでなく、より創造的なツールとしてのダイナミズムがあるのではないか、というのが本ワークショップの問いである。事典の編纂・刊行は、作家や作品の全般的な情報の更新に伴う各種の重要な発見や課題の可視化といった研究シーズの開拓、さらに、事典の制作チームという大規模な共同研究体制 (フランス本国だけでなく、諸外国の研究者も含む) の構築を契機とした次代の研究プロジェクトの創成など、新たな研究探索を招来する刷新的機能を持つと考えられるのだ。

こうした視座のもと、フランスで刊行された作家事典に実際に分担執筆者として参加した3名のパネリスト——シャンピオンの『ジョルジュ・サンド事典』(2015)に参加した坂本、ガルニエの『バルザック事典』(2021)に参加した鎌田、そして近刊が予定されているガルニエの『ヴェルレーヌ事典』に参加した倉方——が、作家事典のプロジェクトの展開の現状、編纂の具体的なプロセス、制作を通じて得られた知見、今後の課題や可能性について各々の観点から考察を試みた。

坂本の発表はシャンピオン社から 2015 年に出版された *Dictionnaire George Sand* に関するものである。これは 2 巻本で、通しのページ数が 1261 ページ、項目数は 324。編纂者はクレルモン・フェラン・ブレーズ・パスカル大学のふたりの女性教授であり、このふたりを含めた項目執筆者数は 84 人であった。坂本が編纂者から声をかけられて *Réception de G. Sand au Japon* の項を執筆することになったのは、2003 年だった。かなり早い時期に原稿を完成して提出したあと、*Marie d'Agoult* の項の執筆依頼があり、これも早々に書き上げて提出した。しかし、それ以後だんだん音沙汰がなくなり、プロジェクトは空中分解したのではないかと思っていたが、2012 年になって急速に編集作業が進展して最低限の変更や情報追加を行い、やっと 2015 年に 2 巻本で出版された。

事典の全 324 項目のうち、作品関係が 181、人名が 55、その他が 88 である。作品と人名の項目は過不足なく取り上げられているが、その他の項目に関しては、他事典と比べてかなり数が少ない点と選択の恣意性が特徴的である。たとえば、サンドの教育観とか売春観について知ろうとしても、この事典はあまり役にはたさない。そのかわり、21 世紀初頭のサンド研究で何が特に注目され研究されていたのか、研究者たちの関心がどこにあったのかはよくわかる。また、日本を含めた 11 の国と地域でのサンド作品の受容について全翻訳と主要研究書などがあげられており、かつ *Réception de G. Sand...* という項目名でいっしょに並んでいるため、世界的な規模でのサンド研究の実態がよくわかるようになっている。

2 巻で 180 ユーロというこの事典の値段を見ると、チャンピオンが想定したこの事典の読者・購買者は、おそらくフランス文学研究者や学生、大学図書館などで、それ以外の一般の人々の購入はあまり考えなかったであろう。しかし、2020 年になって、この事典は新しい形で売り出された。1 巻本で値段も 38 ユーロとかなり安くなり、本の装丁も、表紙にサンドの肖像画をのせるなど、親しみやすくなっている。中身はかわらなくても、想定読者・想定購買者を変更したのであろう。最後に今後のサンド事典について考えてみると、インターネットなどの技術がどんどん進歩した今の時代では、紙ではなくデジタル資料とし、定期的に内容を新しくしたり、各種の画像、表、グラフを入れたり、あるいは音声データ、動画ともリンクさせて、サンドの百科事典のように進化させることも可能ではないだろうか。

鎌田の発表『『バルザック事典』のコンセプトと構成』は、*Dictionnaire Balzac* の特徴である「網羅性」の追求のインパクトを考察するものである。セルベール&クリストフ『『人間喜劇』の人物総覧』(1887)以来、バルザックの作品世界に関する多数の人名・地名総覧、小事典等の参照ツールが編纂されてきたが、エリック・ボルダスら 3 名の編纂による本事典はその包括性の展望においてこれらと決定的に異なる射程を持つ。バルザックの 51 年間の生涯、527 のテキストに関して 2818 件の見出しと 1234 件の項目を収録。分担執筆者は計 42 名(内フランス以外は 9 名)である。鎌田は生成論、ジャーナリズム、エディションなどの項目を中心に計 72 件を担当した。執筆開始から刊行まで 12 年余りを要した本事典は、バルザックの全作品、主要な関係人物、地名、語彙、事物・概念を可能な限り余すところなく立項している。多数の作品が横断的に連結し、

巨大なエクリチュールの運動を形成しているバルザックの創造世界の力線を描き出し、どのようなテーマがどうつながり、どの作品に具体的に姿を現しているのか、批評的争点は何であるか、いかなる課題が残るかといった点の記述が試みられた。これらの項目立てと記述は、伝統的研究を考慮しながらも、とりわけ過去 30 年ほどの新しいバルザック研究の所産であり、文献情報から解釈までアップデートが行われている。他の作家事典に見られないほどの網羅性の徹底した追求は、実際、編纂者・執筆者にとって多大なプレッシャーであったと同時に、広範囲の資料調査をもたらし、多くの派生的研究プロジェクトを生んでいる（鎌田がオーガナイザーの一人となった 2021 年の国際シンポジウム「Balzac en collaboration」もその一例である）。こうして刊行された同事典では、クロスリファレンス方式が活用されており、集積された情報と情報を読み手がつなぎ変える創造的な読解を可能にするツールとなっている。ある項目からどの項目へと横滑りするかによって、読み手の数だけ異なる読み方が生まれる。新たな概念的、テーマ的、言語的、資料的布置構造の発見へと開かれたツールなのだ。膨大なバルザック研究の蓄積を初めて包括的に整理統合し、次代の研究を準備する画期的な事典が誕生したと言えよう。

倉方の発表は、2014 年頃に企画され、現時点で未刊の *Dictionnaire Verlaine* に関するものである。詩人ポール・ヴェルレーヌに関する研究は 1990 年代以降大きく進展した。新資料の発掘や、作品の新たな校訂版の出版が相次いだが、それらを集約する場、たとえば新たな全集・著作集の刊行は実現していない。専門研究者でさえ研究現状の把握に労苦を要する状況が、ヴェルレーヌの作家事典が必要とされる背景にある。マギル大学のアルノー・ベルナデを編者とする同事典は、2014 年時点の資料では、執筆者は 31 名、項目は 638 となっていた。執筆者の中心は 2000 年以降に博士論文を執筆した研究者である。項目には重要度に応じて A (500 字)、B (2500 字)、C (7000 字)、D (15000 字) の 4 段階で長さが決められており、倉方は A を 14、B を 8、C を 6、D を 1、計 29 項目を執筆した。執筆に際しては編者から、事典の「序文」となるべき文章が事前に共有された。そこには *pédagogie*、*érudition*、*analyse* を各項目の重要な要素とする旨が書かれていた。クラシック・ガルニエ社から出版されている作家事典については、同社のサイト上でそれぞれの「序文」を無料で読むことができる。これらを詳細に比較検討すれば作家事典の多様性は明らかになるかもしれないが、その逆に、どれも非常にもっともなことを書いているという点で大差な

い、という可能性も大いにありうる。*Dictionnaire Verlaine* も、編集の経緯、執筆方針、編集・刊行の遅延など、多くの点で平均的な作家事典であるかもしれない。執筆に関わる経験は、個人のレベルでは大いに実りのあることだったが、その意義については考える点もあった。外国の文学や思想をその土地の流儀で研究することは「大伽藍の建造に外国人労働者が参加して、石を積むようなもの」(塩川徹也)にも喩えられる。フランス語で項目が立てられ、長い研究史を基盤とする作家事典は、まさしく動かすことのできないカテドラルであるとも感じられた。現在、多くの日本人研究者が関わる数々の作家事典の成果は、どのように日本で還元されるのだろうか。徹底した補充改訂を経た『事典 プルースト博物館』(筑摩書房、2002)のような稀有な成功例もあるが、「作家事典」そのものを日本語に移すことは一般に困難だろう。綿密な翻訳や研究書・一般書といったかたちで、フランスでの作家事典の隆盛が、日本においても反映されることを期待したい。

3名によるプレゼンの後、会場からは、情報更新が可能なウェブ版事典や複数の作家・作品を横断的に捉えるテーマ別の事典をめぐる示唆的な意見が挙げられ、文学事典全般のさらなる可能性を探る有益なワークショップとなった。

ワークショップ6

シャルル・フーリエをどう読むか

コーディネーター・パネリスト：福島知己（帝京大学）

パネリスト：大森晋輔（東京藝術大学）、森元庸介（東京大学）、中村恭子（九州大学）

シャルル・フーリエ（1772-1836）はフランス 19 世紀の文筆家であり、ゴチエにはじまりプラ、ブルトン、クノー、バルト、カルヴィーノらさまざまな作家、批評家によって言及されてきた。

しかし、名前こそ比較的知られているが、その思想の内容はあまり知られていない。ユートピア社会主義の巨匠、協同組合運動の先駆け、フロイトの前駆といった各種の評価は、結局のところ、何ものかの先駆という評価にすぎない。

本年、フーリエの生誕 250 周年を迎え、また『愛の新世界』、『産業の新世界』といった著作の全訳公刊など、国内の研究をめぐる環境の変化を踏まえ、本ワークショップでは、今後の研究活性化の起点となるべく、多面的な観点からフーリエを「読む」ことを試みた。

なお、以下の要約は報告者自身にご執筆いただいたものである。

1. シャルル・フーリエのユートピア——『産業の新世界』から

福島知己

シャルル・フーリエの思想を、理論以前の心的態度までを含めて要約的に述べれば、以下の7点を指摘できる。①文明世界と調和世界の両者を鏡に写したかのような対照性におく構図、②リンネの植物分類を範として森羅万象を綱、属、種に分類して理解しようとする分類学的思考、③万事を上昇—絶頂—下降という三角形の構図において安定させようとする志向、④人間行動の原理としての情念論、⑤階級間の格差を利用した階級融和という考え方、⑥1,600人規模の共同体を世界中に簇生させることによって情念の発展を実現しようとする構想、⑦アナロジー論を貫徹させた宇宙論。しかし、1830年以降弟子たちが形成したフーリエ主義グループには、政治参加の企図や共同体建設への関心など、フーリエとは異なる特徴が見受けられる。従って両者を区別する必要がある。そのうえで、フーリエが後世にどのような影響を与えたかを考えるときには、フーリエ主義者のフーリエ読解を媒介項に置く必要がある。

フーリエ自身は「ユートピア」という言葉を否定的な意味でしか使わない。それでも、ポール・リクールにならって、現実を変えるという実践的機能を果たしうるものとしてユートピアを再定義すれば、フーリエの思想をユートピアの光のもとで照射できる。フーリエの情念論は、人間だれもがもつ情念が適切に配置されれば物事が調和的に進むという確信において、現実にも根ざすとともにその変革を目指している。実際、『産業の新世界』では日常生活での出来事——たまたま知り合った人とおしゃべりがきっかけで一生をかける天職を発見するとか、趣味で始めた園芸が評価されその道の第一人者となるなど——が、

現実を変える小さなきっかけとして描かれている。その意味でそれは、フーリエが『愛の新世界』で描いたファクマの物語のような共同体全体を揺るがす記念碑的出来事ではないが、現実のあわいに忽然と現れるきらめきという意味で、ユートピアであると言える。

2. クロソウスキーはフーリエをどう読んだか——情念の社会学としての神学

大森晋輔

クロソウスキーはフーリエをどのように位置づけており、その位置づけにはどのような意味合いがあるのか。これを探るのが本発表の課題である。

クロソウスキーはフーリエを、あくまでサドとの対比の中で捉えている。その思考の根底には人間の欲望と、その欲望を抑圧する言語や法などの制度とのせめぎ合いがつねに横たわっているが、クロソウスキーは生殖目的に還元されない欲望を倒錯と呼び、サドとフーリエを対比する上でこの概念を導入して、ある種の「欲望の経済学」をそれぞれに見ていた。

クロソウスキーは論考「サドとフーリエ」、あるいはそれをリライトした『生きた貨幣』（ともに 1970）において、倒錯が規範や制度とどのようなかかわりを持つのか、またそのかかわりにおいて、サドとフーリエはそれぞれどのレベルで、何を、どのように、共有しようとしているのかを問うている。サドは既存の制度の中に倒錯を取り込み、あくまで規範の内部において規範への攻撃を行うが、フーリエにとっては欲望（諸情念）の戯れに見合うような社会制度を新たに作り上げることが重要だった。また、サドの構想する秘密結社では欲望の伝達／交換は本質的に不可能であるとされているのに対し、フーリエのファランステールでは倒錯の豊かさの共有が重視され、情念の創造的発露としての労働が構想される。

クロソウスキーは、欲望と制度を媒介する貨幣が席卷する高度資本主義社会を予見したのは情念の伝達不可能性をより意識したサドの方であるとして、その想像力を顕揚する。しかし同時に、自らを価値評価にさらず「セラドン愛」への言及に見られるように、クロソウスキーはサドとフーリエがさほどかけ離れているわけではないことを指摘しつつ、いわば「情念の社会学へと達する一個の神学」をフーリエに見ていた。これは、欲望と制度の関係を論じる上でサドの思考に偏りがちだったクロソウスキーが、「愛の宗教」を構想したフーリエ

の方にも新たな可能性を見、むしろフーリエの思考をばねにして彼自身が倒錯に基づく新たな社会を想像していたことの表れと言えないだろうか。

3. 産業と密謀

森元庸介

本発表では、フーリエ『産業の新世界』に現れる「密謀情念」なる概念に着目しつつ、あえて自由連想に身を委ねつつ、産業と密謀が組み合わされるゆえんの一端を探ることを試みた。

来たるべき調和世界における産業体制のありかたを構想するフーリエにとって、諸々の情念ないし「情念引力」は目指されるべき組織化のもっとも重要なファクターだが、なかでも、競争相手に負けまいとして発揮される「密謀情念」は、人間に労働を意欲させる最大の誘因として特別な位置を占める。突飛な着想のようだが、ある程度の経脈は考えられる。

バンヴェニストは、ラテン語 *industria* の核心が「奥底で築くこと、企むこと、密かに仕組むこと」であることを指摘し（『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』第3部第2章）、密謀をひとの内面で為される「計算」とするフーリエの捉え方はそれによく呼応している。同様の理解はたとえばラ・ロシュフーコー『箴言集』などにも認められ、*industrie* の仄暗さは意味論にある程度まで確認されるが、発表ではさらにトマス・アクィナスのいくつかのテキストへさかのぼった。そこでの *industria* は、あるいは聖書的な文脈（たとえばヨブ記 34、27）に基づいて罪と明白に関連づけられ、あるいはアリストテレスへの参照とともに道徳的に中立な（純然たる）技術とみなされながら、いずれにせよ、狭義の人間的な領域を徴しづける。この点は、フーリエが、ほかならぬ神学者たちの介入を斥ける意図のもと、産業の改良を（神人としてのイエスならぬ）人間に課されたタスクと位置づけたことを思うとき、少なからず示唆的であろう。

だが、過去への参照からフーリエを説明することが問題なのではむろんない。『新世界』におけるクロエの挿話がよく示すとおり、フーリエのいう密謀は、本来その対極にある偶然性（「ゆきずり」）と深く結びれてあり、その作為と無為の結合こそが無比の魅力であることを述べ、ひとまず発表を終えた。

4. 無限小の肉体を再生する——書き割り少女、反古墳——

中村恭子

創造性とは、多くの場合、作者が意図したことを実現する行為であると思われるがちだ。しかし、制作の現場においてそれは創造とは程遠い行為だ。アガンベンはこの行為の矛盾について潜勢力と現勢力の違いを示しながら、積極的に為さない態度として、潜勢力を発揮することこそが真の創造に繋がると説き、それを「脱創造」とした。

脱創造は、「書き割り」と呼称し得る空間表現に見られる創造性として理解できる。日本の古画に多く見られる図形の半円が連なる板状の山並み風景がそれである。舞台背景装置としての書き割りは、裏側が描かれない、裏が無いことで、表面において視界が断ち切られる。そこで板状の山並みは、遠・近やこちら・向こうといった対応関係が想定可能な向こう側など世界には無いことをあらわにする。つまり、見えない向こう側＝知覚世界外部を記号化し、擬似外部を仮構するのではなく、書き割りは真にその背後に外部を配する装置と考えられる。このようにして外部をもたらすことができる創造性は、フーリエの無限概念と密接であると考えられる。

フーリエは、無限小と無限大の創造性を示している。フーリエの無限概念は、数学の無限概念とは異なり、フーリエは、数学的な、量的概念としての無限小・無限大を、いずれも無限大として扱っていると捉えられる。無限大は、擬似外部を実現する概念だ。他方、フーリエの無限小はまさに、記号的な世界や身体の全体性を脱色し、外部をもたらす質的概念だ。個別（無限小）の文脈の可能性を試し、楽しみ、実現する、融通無碍な創造性の探求である。

これまで、書き割りが見られる具体的な事例としてチリ最南端の失われた民族やチリの墓碑アニミータ、日本の古墳などに見られる書き割り化構造を見出し、これらを題材にこの構造を示す作品制作を行ってきた。その過程で、いかに作品として書き割り構造を全面化して創造的な人間の肉体を与えることができるか、という新しい肉体イメージが想起された。それは、フーリエが示したアルシブラを具備した人間や反キリンなどの未来の動物種の在り方を具体的に実装する作品として提示できるだろう。

聴衆は50人を超え、立ち見も出る盛況であった。参加して下さったみなさまに厚く感謝申し上げます。時間の都合で十分な質疑応答を行うことができなかったが、ワークショップの内容は後日公刊する予定であるので、さらなる議論を喚起できれば幸いである。

(福島知己)

II 書評

文芸事象の歴史研究会（編）『GRIHL II 文学に働く力、文学が発する力』、
吉田書店、2021年

評者：菅谷憲興（立教大学）

GRIHL（文芸事象の歴史に関する学際研究グループ）の第二論集が刊行された。前作同様、文学と歴史記述の複雑な関係性をめぐる日仏の共同研究の成果であり、文学研究者と歴史家の真摯な対話の証言である。文学へのアプローチそのものを問う方法論的な姿勢が前面に出ていた前作とは異なり、本作では「権威－権力 *autorité(s)*」という共通のテーマを設定し、各人がそれぞれの専門領域と問題意識を活かしつつ、ある程度自由にそれに取り組むという形を取っている。共同研究の深化にともない、プロジェクト自体もより実践的な第二段階に入ったということだろうか。実際、目次を一読すれば分かるように、扱われている対象も、論じられている作家も、よく言えば多様、悪く言えば雑多であり、このあたり読者によっては評価の分かれるところであろう。少なくとも本の使い勝手という意味では、研究グループごとに成果をまとめるよりも、単純に世紀ごとに論文を並べてくれた方が読みやすかったのではないかと感じた。もちろん、あくまで評者の個人的な、それも視野の狭い意見にすぎないが。

それでは、章ごとにかいつまんで内容を紹介しよう。第1章は啓蒙の世紀を扱った三篇の論考からなっている。まずレチフ・ド・ラ・ブルトンヌを扱った森本淳生の論文では、レチフ的な作家のマイナー性が、父になることの困難という父性の（失敗の）問題と結びつけて論じられている。桑瀬章二郎は、『告白』の一エピソードから出発して、ヴォルテールとラモーの緊張をはらんだ共同作業、さらにその二つの「権威」に対峙するいまだ無名の文人ルソーという構図のもつ意味を分析している。ダイナ・リバルはカシエとデフォルジューマイヤールという無名の二人の「過剰な作者」を取り上げ、啓蒙の時代に作家になるという経験がいかなる社会的含意をもっていたのかを明らかにしている。

第2章は、日仏二人の歴史家による「出来事の構築」をめぐる考察を収録している。クリスチアン・ジュオーと嶋中博章がともにルイー四世時代の文書を素材に検討するのは、書かれたテキストが過去の証言としての「権威」を帯び

る絡繰りに他ならない。前者の分析するフロンド時代のメモワール作者も、後者が取り上げる太陽王が死に際して口にしたとされる台詞の例も、確かに史料とは何かについて根底的な問いを喚起せずにはおかない。ただ、少なくとも評者のような文学研究者にとっては、このようなメタレベルの問い（歴史記述批判）の先で、いかにして歴史を物語る事が可能かを見たいというのが率直な感想である。

第3章は文学と政治の関係をテーマに、一九世紀と二〇世紀についての論考が並んでいる。ジュディット・リオン＝カンと辻川慶子の共著論文は、第二共和制下に新聞連載小説をターゲットにした抑圧的な法が制定された経緯と、それに抵抗すべく作家たちが様々な戦略をめぐらす様を描き出したものだ。リオン＝カンの文学社会学的なアプローチと、辻川の文学テキストの精緻な分析が相まって、きわめて読み応えのある論考となっている。一方、杉浦順子の論文は、一九三〇年代という文学場が政治化した時代を背景に、作家の政治参加（アンガジュマン）をいわば素朴に肯定するアンリ・バルビュスとの比較によって、当初は左翼系知識人の近傍にいたセリーヌの特異な立ち位置を浮き彫りにしている。

検閲という制度の問題を扱った第4章は、大きく離れた二つの時代を取り上げている。まずニコラ・シャピラが着目するのは、一七世紀の宗教書のなかに載録された神学博士による「承認」である。当時の出版允許のプロセスの単なる痕跡と従来みなされてきたこのパラテキストを、複数の意味を産出する「装置」として分析するという視点は、評者のような他の時代の文学を研究する者にとっても示唆に富んでいる。次に、マラルメの専門家でもある中畑寛之の論考は、おもに第三共和政下における検閲の実態と、それに対する作家の抵抗戦略、とりわけ訴追された書物の再版がもつ意味について検討している。

第5章は、この論集の「序」の著者でもある野呂康の論文にあてられている。第4章のシャピラ論文とも共鳴する内容であり、アントワヌ・アルノーの著作が引き起こした論争の過程を丹念に跡付けたものだ。アルノーのテキスト自体の複雑な構成、特にそのパラテキストのもつ戦略的な意味に加えて、相手方のイエズス会側の攻撃と、それに対するジャンセニスト側の応答など、まさに「権威」をめぐる闘争が繰り広げられる様が複合的に記述されている。さらに、以上の五章からなる第Ⅰ部に続いて、第Ⅱ部として二本の講演が収められている。マザリナードについてのクリスチアン・ジュオーの講演と、戦後ポーラン

ドで作られたイディッシュ語の映画を分析したりオン＝カンの講演であり、ともに歴史表象と証言の問題にかかわるものだといえよう。

ここまで駆け足で各論文の内容を見てきたが、最後に価値の問題について一言したい。文学社会的なアプローチは価値の相対性を前提にすることが多いが（本書の序にも「普遍かつ絶対的な内在的価値を有するテキストは存在しない」とある）、文学を読むことがもはや自明性を失っている現在、文学研究が究極的に目指すべきは、むしろ「価値」を積極的に突きつけることではなかろうか。その意味で、この論集におさめられたりオン＝カン・辻川論文、特にその最後のネルヴァル作品の分析には大きな刺激を受けた。実際、文学フィクションの力を律すべく作られた法に対する同時代の反応の中でも、『塩密輸入人たち』の作者が示した抵抗は、その人を食ったユーモアにおいて際立っている。新聞に小説を載せることが禁じられた時代、あたかも権力を揶揄するかのよう「これは小説ではない」と繰り返しながら、真とも偽ともつかぬ荒唐無稽な逸話（カナル／フェイクニュース）を積み重ねていくネルヴァルのテキストは、政治性にも決して欠けておらず、しかも「アンガジマン […] とはまったく異質な文学の力」を軽やかに肯定している。特筆すべきは、このような作品分析が論文前半部における政治と文学場との葛藤の実証的な解明に支えられていることだろう。たとえば評者が専門としているフローベールのような「作品の自律性」を掲げる作家を考察するにあたって、今や歴史的・社会的なアプローチが不可欠だと考えられているとしたら、それは文学史のキャンオンを相対化するため（だけ）ではなく、むしろコンテキストの精緻な検討の果てに、テキストを読むという無時間的な体験が最終的に浮かび上がってくるからではなかろうか。それこそが文学研究が必然的にはらむパラドクスなのだと思うべからぬ。

ジャンーポール・サルトル（著）『家の馬鹿息子V ギュスターヴ・フローベール論（1821年より1857年まで）』、鈴木道彦、海老坂武監訳、黒川 学、坂井由加里、澤田 直訳、人文書院、2021年

評者：山崎 敦（中京大学）

2021年12月、サルトル『家の馬鹿息子』邦訳第5巻が刊行された（原著刊行は第1・2巻が1971年、今回翻訳された第3巻は翌72年）。原著で2800頁の訳業が完結をみたことになる。たぐい稀なる壮挙であろう。

ところで本訳書の刊行がフローベール生誕200年の、それも誕生月であったことは、よもや偶然ではあるまい。反対にたんなる偶然でしかないのは、フローベールが1880年に没し、サルトルがその一世紀後に没したことだが、一方が『ブヴァールとペキュシェ』を、他方が『家の馬鹿息子』を未完のまま遺したこと——これにかぎっては、偶然といって済ませるわけにもいくまい。『家の馬鹿息子』ほどブヴァールの作品はおよそ存在しないからである。その法外な分量、その引用の増殖ぶり、なによりその主題。すなわち「愚かさ *bêtise*」。この主題の裏面にぴたりと、「挫折」という、「愚かさ」と対をなす主題がはりついている。

そもそもギュスターヴはどうしてフローベール家の馬鹿息子なのか。七歳にもなって、満足に読み書きひとつできなかつたからだという（第一の挫折）。名医たる父の威厳におしひしがれ、優秀な長兄を逆恨みし、娘の誕生を望んでいた母の愛に飢え、「馬鹿」のくせに文学に熱狂し、執筆に専念すべく意図して「神経症」になった（1844年1月の発作＝第二の挫折）、そんな不肖の息子。原著第1・2巻のナラティブを乱暴に要約してみたが、これに反発しないフローベールの愛読者はいない。フローベール研究者のあいだでは、「実存的精神分析」の大伽藍を支える基礎、つまり伝記的考証が脆弱であることを口実に、この危うげに立つ大伽藍にあえて足を踏み入れないところがある。よくいえば敬して遠ざけているわけだが、そうしておいてよいものだろうか。

本訳書がその転機になるはずだ。先行する原著第1・2巻で描かれたギュスターヴの「主観的神経症」が、原著第3巻において、1848年から第二帝政期にかけての「客観的精神」のうちに置きなおされ、「ポスト・ロマン派」をめぐる壮大な文学史が、フローベールを主軸にして、めくるめく絵巻物のように展開さ

れるからである。二段組で 600 頁を優に超える本訳書の論述は錯綜をきわめるが、その一端をここに要約しておこう。

まず作家の「主観的神経症」が時代の「客観的神経症」に重ねあわされる。つまりギユスターヴひとりが神経症であったのではなく、時代全体が神経症であったのだ。かくして 44 年の発作と 46 年の父の死が、48 年 2 月革命と 6 月虐殺、さらに 51 年 12 月のクーデタに重ねあわされる。さらにギユスターヴの挫折は、芸術家の挫折（読者との断絶）、人間の挫折（階級＝人間からの離脱、その不可能性）、作品の挫折（文学の不可能性）の三つの客観的挫折に重ねあわされる。文学はこの挫折の三つ巴によって絶対的な「否定」の相のもとにおかれる。世界の否定（現実の無化）を志向するものこそ「絶対芸術」であり、フローベールやマラルメ、ボードレールやルコント・ド・リールなど、「ポスト・ロマン派」はみなひとしく「絶対芸術」の信奉者だという。

では、なぜ芸術は絶対的な否定性に陥ったのか。サルトルは断じる、神が死んだからだ、と。「〈神〉の死はポスト・ロマン派の作家たちを克服しがたい葛藤に陥らせるだろう。というのも、〈神〉とともに聖なる靈感も消えるからであり、つまるところ作るべき〈芸術〉は、その特権的な読者だけでなく、唯一の価値ある作者も失うからだ」（185 頁）。神の死という命題に、いまさら驚くものもないが、なにが神の座を襲ったのか、この問いへのサルトルの回答には、あらためて驚いておこう。「1850 年には、ヒューマニズムは黒かった。〈人間事物〉——加工された物質、加工可能な物質——が神に代わっていた」（290 頁、強調原著者）。封建時代でさえヒューマニズムはかりそめにも白かった。しかし「人間事物」が神を追い出した 1850 年にあっては、どす黒い。白が神を媒介とした愛ならば、黒は「人間事物」を媒介とした憎悪である。

では、なぜ人間は憎悪に染まり、人間事物に頹落したのか。6 月虐殺に対するブルジョワの自責の念のせいだという。ブルジョワのプロレタリアへの憎悪でもなければ、その逆でもなく、ブルジョワの自己憎悪こそが根底にある。自己憎悪は純粹概念にまで昇華する。そして三つの理念として具現化する——利潤のための利潤、科学のための科学、芸術のための芸術（287 頁）。この三位一体こそが第二帝政期のブルジョワ・イデオロギーの正体であり、フローベール（芸術のための芸術）が、テーヌとルナン（科学のための科学）と抱きあわされて、ブルジョワを批判する、きわめつきのブルジョワ礼賛者として、断罪される。

この断罪は、フローベールのパリ・コミューンに対する反応を論じる、本訳書終盤で再燃する。サルトルは、コミューン後に執筆された『ブヴァール』にも悪罵のかぎりをつくしているが、そこで思いおこすのは、コミューンからほぼ一世紀後、68年から71年にかけて『家の馬鹿息子』の執筆にかかりきりになっていたサルトルが、マオイストの取り巻きに、そんな馬鹿なことはやめて、もっとアンガジェせよと、叱りとばされたという逸話である。ブヴァールとペキュシェの対に、フローベールとサルトルの対を、並べてはいけないだろうか。

高橋 純(著)『高田博厚＝ロマン・ロラン往復書簡——回想録『分水嶺』補遺』、吉夏社、2021年

評者：吉川一義

『蟹工船』の作者小林多喜二は、1933年2月20日、特高警察の拷問にて殺害された。そのときパリに滞在していた彫刻家高田博厚(1900-1987)がのちに回想したところによると(1974年に雑誌『世界』に掲載された「分水嶺」など)、高田の求めに応じてロマン・ロランが多喜二虐殺への抗議文を執筆、それがフランス共産党機関紙『ユマニテ』に掲載されたという。この逸話は、その後、多喜二の年譜に記されるなど流布した。

ところが『ユマニテ』紙をいくら調べても肝心の抗議文は見当たらない。すると高田の回想は「虚言」なのか、それとも「記憶の錯誤」なのか。高橋純氏は、当時の新聞雑誌を渉猟し、パリの国立図書館にてロランの未発表の書簡や日記を精査し、数多くの貴重な発見を積み重ね、この謎を鮮やかに解いてみせた。本書は、多数の付録資料とともに、この発見の経緯をものがたるスリリングな実証研究の成果であり、高田への深い敬愛に貫かれた感動的なドキュメントである。

収録資料のなかで高橋氏がまず発表したのは「多喜二とロマン・ロラン——高田博厚が伝えた「幻の抗議文」について」(初出 2009)である。当時の新聞を調査したところ、高田がパリで接した悲報は、前年の1932年7月30日付『赤旗』に掲載された「191名の共産主義者の求刑に對して國際プロレタリアー

ト勤勞大衆に訴ふ」と題する日本共産党のアピールだった。高田がこれにフランス語大意を付してロランに抗議文を依頼した結果、同年 9 月 29 日付の『ユマニテ』紙に「日本の白色テロ」と題する記事が出て、そこにロランの抗議文と日本共産党のアピールが掲載された。高橋氏は、これが高田の記憶のなかで翌年の多喜二虐殺への抗議文と混同されたと推定したのである。

氏はその後、フランス国立図書館の「ロマン・ロラン寄贈資料庫」のなかに、高田からロラン宛の 14 通と、ロランから高田宛の 9 通、都合 23 通の未発表書簡を発見した。高田が渡した 1931 年にはじまり、ロランが死去する 1944 年に至る、ふたりの芸術家の交流を明かす貴重な証言である。この往復書簡の発見によって「多喜二とロマン・ロラン」にて提示された状況証拠の正しさが立証された。実際、1932 年 9 月 23 日付でロランから高田に宛てた手紙には「これから私自身の手で抗議文を[...]『ユマニテ』に送り[...]紙面に載るように計ります」と記され、9 月 29 日付の同紙に前述のとおり「日本の白色テロ」と題する抗議記事が掲載されたのである。

往復書簡は、師弟としての友情の証言でもある。高田はパリ到着後の 1931 年 4 月、すでに作家の知遇を得ていた片山敏彦に伴われてスイスのヴィルヌーヴにロランを訪ねた。するとロランは、高田の彫刻の写真数葉を見ただけで、数日後、自分の胸像の制作を依頼してきた。片山に宛てた手紙によれば、ロランは高田を「単に外形だけを形づくるのではなしに、形にしるしづけられている精神をも形づくる、ほんとうの芸術家」だと絶賛していたのだ。1931 年 12 月、インド独立運動のガンジーの来訪が予定されたときも、ロランは高田にガンジーの「クロッキー」を描くよう持ちかけ、パリからヴィルヌーヴまでの旅費を同封、滞在中の出費も引き受けると請け合った。

往復書簡を読めば、平和主義者ロランが、東京で投獄され、家族を置いて日本を脱出してきた青年の境遇に限りない共感と同情を寄せていたことがわかる。1932 年 9 月、ロランが高田に「抗議文」の執筆を約束した例の手紙では、その直前で「あなたが個人として前面に出てはなりません！[...]あえてそんなことをすれば[...]彼ら〔日本政府〕はあなたの生涯にわたって、国に帰る道も、家族のもとに戻る道も閉ざしてしまいかねないからです」と忠告している。

高橋氏は最近、前述したガンジー来訪の後日談を紹介し、ロランが高田の苦境に精通していたことを明らかにした。同席していた高田についてロランは日記にこう記していたのだ。「彼は数年前に日本でコミュニストとして投獄され、

拷問さえ受けたことがあると言う。針金で折れるほど締め上げられた指の一本に残る歪んだ跡を彼は神経質に笑いながら見せた。妻子を日本に残してきたそうだが、その暮らしぶりはきっと彼のパリの暮らしと等しくぎりぎりのものなのだろう」（「1931年12月10日の高田博厚——ロマン・ロランの証言から」、
「図書」2022年5月号）。

最後に私的感想を記すのをお赦しいただきたい。論文「多喜二とロマン・ロラン」を初出時に読んでいた私は、2017年6月、高田没後30年の記念行事が開催された埼玉県東松山市を訪れ、本書の概要を先行紹介する高橋氏の講演「ロマン・ロランと高田博厚——新発見の日記・書簡から——」を拝聴し（<https://www.youtube.com/watch?v=X9qWxdwPUv0>にて視聴可能）、氏の高田に寄せる敬愛の情に心を打たれた。

その日は「高田博厚没後30年展」と高坂駅前「彫刻プロムナード」に展示されたロラン、コクトー、ルオー、ガンジーらの胸像を鑑賞する機会にも恵まれ、高田がこれら傑作で表現したのは、モデルの生涯を貫いていた精神そのものであるとの想いを深くした。展示作品リストによれば、ロラン像は1961年、ガンジー像は1966年、いずれも高田帰国後の作品である。パリ滞在を切りあげて1957年に帰国したとき、高田は「在仏中に制作した全作品、石膏原型もすべて破壊したという（福田真一作成の年譜）。するとこれらの彫刻群は、モデルのスケッチから30年も経たず帰国後、主として記憶にのこるイメージから制作された、高田の精神の所産と言えるのではないか。ロランが「精神をも形づくる」と喝破した高田の手になる胸像の精髓は、これにて一層純化されたのかもしれない。

松澤和宏、小倉孝誠（編）『フローベール 文学と〈現代性〉の行方』、水声社、2021年

評者：寺本弘子（アリアンス・フランセーズ仙台（兼））

本書は、ギュスターヴ・フローベール（1821-1880）生誕200年を期して、フローベール文学における「現代性」をキーワードとして出版された記念論集で

ある。フローベール文学とモデルニテとの関係性再考という松澤氏の発案に小倉氏が加わり、コンセプトと構成を練ったうえで実現したというのが本論集の趣旨であると思われる。その巻頭には松澤氏による、詳細で大局的見地に立った「序」と題された解題がおかれ、「リアリズムの巨匠」、「芸術至上主義者」、「小説の現代性の創始者」という「レットル」は、フローベール文学の孕む複雑な諸相を説明できないのではないかというポレミックな問題提起がなされている。氏の企図は、とりわけ 1960 年代から 70 年代にかけてのヌーヴェル・クリティークやテキスト理論の隆盛を背景にして形作られた「モダンな」フローベール像を問いに付すことにある。

巻頭の言に続いて、最近 30 年のフローベール研究の動向が紹介されている。草稿、読書ノートの判読転写による間テキスト性の研究の進展、プレイヤッド版全集刊行の完結など、研究対象の拡大と充実が指摘された後、顕著な研究の成果として、この作家の純粹芸術の理念や美学、倫理についての研究、文体における自由間接話法やポリフォニーについての研究、同時代の歴史的・社会的・政治的文脈からの読解、さらに他の作家たちの作品との間テキスト性の研究などが挙げられている。

本論は 3 部構成で、第一部はフローベールの個々の作品研究、第二部はフローベールと先行する時代の歴史資料や同時代の 19 世紀の作家たちとの関係、そして第三部は 20 世紀文学におけるフローベール受容に充てられており、それぞれの部の最後に本論集の二人の編者の「補論」が置かれている。また、巻末には「研究ノート」として、フローベール作品の研究史概略と小説の翻案映画の紹介が添えられているが、こうした考証資料の充実はまとまった量の「主要参考文献」とあいまって、後進の研究者たちの道標となること必至である。

論考の内容を紹介すると、第一部では初期作品から『ブヴァールとペキュシェ』に至るフローベールの代表的な虚構作品についての論考がほぼ時系列に並べられている。そこでは、初期作品と晩年の『聖アントワヌの誘惑』の間の作家像の変貌、『ボヴァリー夫人』結末の作中人物シャルルの描写における「愛」と「赦し」の主題およびアイロニーの重量がもたらす無常観、ルソー、カバニス、メヌ・ド・ビラン、スピノザなど先行する世紀や同世紀の思想のフローベール作品への影響、『サラムボー』、『感情教育』における描写や文体の特徴、『感情教育』における作家による同時代の歴史認識と歴史表象、『ブヴァールとペキュシェ』に認められる政治的平等の批判と文学創造における作家の「すべ

てのものの平等」への志向性、同小説における児童教育の失敗と善悪の平等の主題など、多種多様な側面があぶり出されている。

第二部で扱われている主題も多岐にわたる。『サラムボー』と、ポリュビオス『歴史』およびミシュレ『ローマ史』における歴史知に対する姿勢の違い、フローベールとバルザックのジャーナリズムに対する姿勢と作品における表象、『ボヴァリー夫人』の農事共進会の場面の「モンタージュ的」な手法に対するユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響、フローベール『書簡集』とゴンクール兄弟『日記』に見る第二帝政下の文壇生成の過程、モーパッサンの作家活動における参照軸としてのフローベールというように、主に同時代の作家との比較対照を通して、19世紀作家としてのこの作家の時代性が重層的にとらえられている。

第三部では後世のフローベール受容に光が当てられ、バルトとブランショによるフローベールのエクリチュール論の検討、クノーとペレックへのフローベールの影響、クンデラのフローベール観といった、モデルニテ（あるいはポスト・モデルニテ）の側からの視点が提示される。

本論集のキーワードとなっている「現代性（モデルニテ）」というテーマについては、その理解や取り組み方に論者によって濃淡があり、またそれに対する価値判断が異なる場合も認められた。「文体を「物」に関わる意味内容の次元から断絶させて、エクリチュールの名において特権化する」ものとされる「〈現代性〉の神話からフローベールを解放」（p. 21）することを希求する松澤氏に対して、菅谷氏は、フローベールが文学には美しい主題も卑俗な主題もないという「主題の平等」に信をおき、「文体の絶対性が作品の自律性を保証するという不可能な理想の表明」という「現代文学の先鋭的な試みにもつながる […] 問題意識」を持っていた点を再確認しつつ、作家の文学的営為が「アンチモダンといった単純な図式で割り切れるものではあるまい」（p. 162）と結論している。

また、いわゆる文学の「現代性（モデルニテ）」を研究対象とする論者からも、等し並びには扱えないモデルニテの複数性・多様性が指摘されている。かくして、「「エクリチュール」を特権的な主題とした二人の文学者」（郷原、p. 304）として提示されるバルトやブランショの批評的言説は、「フィクションに対する理論的言説の限界」（蓮實重彦）を露呈するフーコー、ランシエールなどの現代思想の哲学的言説とは差異化され、その可能性が模索されている。他方、現代小説の領野で、一方ではヌーヴォー・ロマン、他方ではクノーとペレックが、

いずれもフローベールの文学遺産を受け取りつつも、前者が「物語の離脱や描写の偏重」に傾いたのに対して、後者の方は「物語自体の復興を試みた」（塩塚、p. 336）という明快で説得的な図式の提示もあった。

「モダンにしてアンチモダンの作家フローベールの文学世界への架け橋」（松澤、p. 28）となることをめざすという本論考において、この作家の相矛盾する両面のどちらを取り上げ、どちらに焦点を当てるかには否みがたく論者自身の個性が垣間見えるのだが、本書を繙く時、読者＝研究者である私たち自身の側でも各々の研究上の姿勢、さらには価値観が試されているように思われる。

Tepei ASAMA, *Proust et les amateurs*, Classiques Garnier, « Bibliothèque proustienne », 2020.

評者：小黒昌文（駒澤大学）

音楽や書物や絵画を偏愛し、居室を飾る工芸品に熱を上げ、ときには収集の欲望に駆り立てられることと、そうした芸術の本質を理解して独自の創作を実現することとのあいだには、どれほどの距離が（それとも断絶が？）あるのだろうか——作家としての道を模索するなかで、マルセル・ブルーストは繰り返し自問し続けた。

エリック・マルティによる指導をうけてパリ第7大学に提出された博士論文（2013年）に基づく本書において、浅間哲平はこの問いを自らのものとして引き受け、ブルーストの生と作品を丹念に、そして端正に分析してみせた。

議論の核となるのは「*amateur*」の一語だ。辞書を紐解けば、「愛好家」や「アマチュア」「美術品収集家」などの意が目にとまり、「プロ」に対する「素人」、あるいは「本物」とは距離のある「道楽」を指すものとして、しばしば軽蔑的に用いられることが確認できる。

だが事態はそれほど簡単ではない。浅間が簡潔にまとめているように、この語は優れて「多義的」であると同時に、それが表す概念は絶えず「流動的」な状態にあり、その傾向は19世紀を通じて——芸術以外の領域にも幅を広げながら——顕著になっていったという。大切なのは揺らぎや曖昧さをそのままに

受け止める覚悟であり、そうすることで浅間は、この語をめぐる文化的・社会的な射程の広さを明らかにしてくれる。

たしかにプルーストは「愛好家」としての在り方について思索を重ね、批評や小説の鍵として「愛好家」を登場させ、自らもまた「愛好家」との（多くは否定的な）評価を受けてきた。では、そうした経験や思考、あるいは作家を取り巻く同時代の思潮は、どのようなかたちで小説作品に溶かし込まれたのか。

300 ページを越える分析は 3 部構成に整えられ、そのひとつひとつには「愛好家」という主題と不可分な、歴史上の、あるいは虚構の人物——Ⅰ「ゴンクール兄弟」Ⅱ「ロベール・ド・モンテスキウ」Ⅲ「スワンとシャルリュス」——が柱として立てられる。一貫しているのは、『失われた時を求めて』＝虚構とそれ以外の言説＝現実を縫い合わせるようにして実践される「弁証法的な」往還だ。浅間は、理論的な整理の易きに流れることを拒み、歴史研究と作品読解を両輪とした考察の徹底によって、「愛好家」をめぐる混沌を丁寧に炙り出してゆく。その過程で様々な位相のテキストを行き来する手さばきがなめらかで、読んでいて心地がよい。

それは例えば、未完に終わった若書きの美術批評——「シャルダンとレンブラント」および「ワットー」——と、遺稿として残された『見出された時』にあるゴンクール兄弟『日記』のパスティッシュとの比較検討であり（第 1 部）、デカダン主義や象徴主義、あるいは唯美主義的な文脈に結びつく稀代のディレタント、ロベール・ド・モンテスキウが批評家アルセーヌ・アレクサンドルと交わした「アマチュア精神」論争の掘り起こしであり（第 2 部）、『失われた時を求めて』の主人公の芸術的な感性に影響を与えたスワンとシャルリュスが、収集家として、あるいは教養豊かな目利きとして「私」に差し出した「芸術と愛とのアマルガム」の丹念な解きほぐし（第 3 部）である。

そのうえで浅間が強調するのは、すべてがわかりやすい対照構造に回収されるわけではないという点だ。ゴンクール兄弟の物質主義的な視線のうちにも主観的な美を喚起する可能性が溶かし込まれているし、「専門家と愛好家」、「芸術と人生」、「スノビズムと反スノビズム」あるいは芸術家の「失敗と成功」といった二項対立がプルーストにとって重要なのは、引かれたはずの境界線が滲み、ときに両者が共鳴し、価値の反転が起きる可能性があるからだ。そのことを例証するために取り上げられるゴーチエやボードレル、さらには同時代のヴァレリー・ラルポーやアンドレ・ジッドの証言も読み応えがある。

元をたどれば、小説家を志しながら書くことができず、最後に至ってようやく進むべき道を見出すに過ぎないプルースト的な「私」こそが、まだ成熟に手が届かない「愛好家」の系譜に組み込まれるべき存在なのだ。遥かな到達点として浮かび上がる芸術家の姿はたしかに魅力的だ。しかし、紆余曲折がありながらも喜びを枯らさず、そこに向かって漸近線的に接近し続けるプロセスこそが物語の肝であることを思い出そう。

だからこそ、本書の議論全体が「私」の人生の道行きへと収斂してゆくのは至極当然のことなのだ。ロラン・バルトが『小説の準備』のなかでプルーストに認めた「書く意志」« *vouloir-écrire* » / « *scripturire* » に着目した浅間は、それが「愛好家」の生と密接に結びついていることを見抜いている。バルトにとってのプルーストは「一種の英雄ならざる英雄」として「書くことを欲する者」をうちに秘めた存在だった。そして浅間の慧眼は、それが他ならぬ「愛好家」の謂であることを、私たちに教えてくれるのだ。

Taro NAKAJIMA, *Entre croyance et savoir. Les Figures religieuses de Flaubert*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2021.

評者：金崎春幸（大阪大学）

フローベールの作品にあらわれるさまざまな宗教的表象を、信仰と科学的な理性という二つの軸を中心に据えて論じた著作である。全体は三つの章からなっている。

論の出発点は『地獄の夢』や『スマール』などの初期作品、その最終形としての『聖アントワヌの誘惑』第一稿である。とりわけ后者で、白髪の子供として登場する「科学」というアレゴリーに中島氏は着目し、その原型がゲーテ『ファウスト』第二部で錬金術により生み出された人工の生命体ホムンクルスであることをつきとめる。フローベールの初期作品とゲーテとの類縁関係についてはすでに他の研究者によって指摘されていたが、中島氏は『聖アントワヌの誘惑』第一稿のセナリオの中に『ファウスト』のブラーズによるフランス語訳と共通する表現を見出すことによって、ホムンクルス

の血脈が「科学」にまで確かに続いていることを明らかにする。異形の子供の姿をした「科学」は、1874年に刊行された最終稿でも同様の姿でイラリオンとしてアントワヌの前にあらわれる。ただし、「科学」がゲーテのように自然や人間精神の究極の原因を遡及的に探ろうとするのに対し、イラリオン（悪魔）はより近代的であり、宗教についてあらゆる知識をそなえた存在である。また、第一稿では「科学」は「論理」というアレゴリーとともに聖書批判を行い、善悪の相対性などの論点でアントワヌを揺さぶる。それらの言説は多くがヴォルテールの『哲学辞典』に由来するものだが、シュトラウスの『イエス伝』からも取られている。ヴォルテールの懐疑的精神やイエスの言動を神話へと還元するシュトラウスの考え方が、スピノザの汎神論とともに最終稿のイラリオンにまで受け継がれていることは言うまでもない。このような「科学」は、キリスト教の信仰を覆すのみならず、それ以外の諸宗教の「知」でもある。「知」による誘惑を体現しているのが、『聖アントワヌの誘惑』の三つの稿いずれにも登場する魔術師シモンやオリエントの秘法に通じたアポロニウスであり、『サラムボー』のカルタゴの祭司シャハバリムである。中島氏はこれらの「知」に魅入られた者たちの系譜を丹念に追っている。

第1章が「科学＝知」を中心に組み立てられているのに対し、第2章では「論理」つまり理性と「信仰」との対話に焦点があたる。理性と信仰の相克は、『ボヴァリー夫人』におけるオマーとブルニジアン神父、『聖アントワヌの誘惑』における「論理」と「信仰」のアレゴリーあるいはイラリオンとアントワヌとの対話を経て、『ブヴァールとペキュシェ』の二人の主人公とジュフロワ神父との論争で頂点に達する。中島氏は、フローベールが『ブヴァールとペキュシェ』第9章のために作成した草稿資料集を解説した上で、ジュフロワ神父の言葉が十九世紀の神父たちやジョゼフ・ド・メーストルの著書から取られていること、それに対するブヴァールとペキュシェによる反論がスピノザ、ルソー、ヴォルテール、ルナン、ラロックなどの言説でできていることを立証していく。たとえば、原罪という教義は正義の概念に反するというブヴァールの主張は、ラロックの『キリスト教教義の批判的検討』における原罪批判に基づく一方、親の罪が子に及ぶことはあらゆる習俗や法に見られる普遍的事実だとするジュフロワ神父の言葉は、直接的にはバグノー・ド・ピュシェスの著作から来ている。ただ、中島氏によれば、後者の著

作の言説もド・メーストルの『サンクトペテルブルク夜話』から借りたものだという。ド・メーストルは同書で、子は親の罪を背負っており、罪ある親が血を流さないときは子の血によって贖わなければならないと述べている。原罪に関するこうした議論は、犯罪者の親をもつヴィクトールとヴィクトリーヌという兄妹への教育をめぐる、懲罰の必要性を説くフェリックス神父の考えを体現するジュフロワ神父と、ルソーの教育論を信奉するブヴァールたちとの対立につながっていく。

第3章のキーワードは欲望である。血と暴力に対する欲望、淫欲、過度の食欲が、苦行への渴望、自らを神に捧げたいという欲求、不可能なものへの渴望と表裏一体のものであることを、聖アントワヌやその鏡像である豚、聖ジュリアンなどの情動を分析しながら明らかにしていく。その上で、現実と夢あるいは官能的な欲望と神秘的な恍惚との狭間を生きる人物として、中島氏はサラムボーと『純な心』のフェリシテを取り上げ、そこに象徴と観念を混同する一種の病的症状を見る。このような見方は、神の幻視体験のような宗教現象を、知的能力が低下して現実と幻覚の区別がつかなくなる精神・神経の疾患と捉えるアルフレッド・モーリーの病理学的な研究から来ている。ただ、幻覚に関するモーリーの論文や著作がフローベールに与えた影響についてはフランス人研究者の論考があり、その後追いになっている感があるのは惜まれる。

本書は、複雑で捉えがたいフローベールの宗教観を、十九世紀の宗教と科学をめぐる論争を踏まえながら解きほぐそうとした労作である。特に、読書ノートや元の文献の綿密な調査に立脚した『ブヴァールとペキュシェ』第9章の分析は説得力があった。今後は、他の研究者が参照していない文献や草稿を掘り起こすことによって、独自の研究を進めることを期待している。

「échos（会員投稿欄）ご投稿のお願い」

échos（会員投稿欄）では、会員の皆様から広く投稿を募っています

◇ 内容について フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセーを広く募集する。例えば、自分とフランス語圏文学とのかかわり、学会とのかかわり、内外の講演会やシンポジウムの体験記、支部会イベントの報告など。

◇ 分量 cahier 2 頁分（2000 字程度）を上限とする。

◇ 掲載の可否について 研究情報委員会での審議を経て掲載の可否を決定する。掲載の可否については個別に対応していくことになるが、最低限の基準として以下の項目を設ける。

- ・ 特定の個人や団体への誹謗・中傷のあるものは掲載しない。
- ・ 「フランス語、フランス文学、フランス語圏、ないしは本学会にかかわるものについてのエッセー」であること。

◇ 締め切り 毎年 3 月・9 月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjllf@yahoo.co.jp

* 掲載の可否についての個別のお問い合わせには、原則として応じかねます。

* 内容に相違のない範囲で、軽微な修正を施した上で掲載させていただくことがあります。その場合にはご連絡いたします。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。なお、ご推薦いただいた本は研究情報委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇ 目的 日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇ 書評の対象 原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇ 推薦要領 学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文(200字程度)を付してください。著作のみの送付については対応し兼ねますので、ご遠慮ください。

◇ 締め切り 毎年3月・9月末日

◇ 宛先 日本フランス語フランス文学会研究情報委員会までメールでお送りください：
cahier_sjlf@yahoo.co.jp

また、学会ウェブサイト **cahier** 電子版の「書評コーナー」に掲載する書評も以下の要領で募集しております。

◇ 目的および書評の対象 上記の書評対象本と同じ。

◇ 執筆要領および締め切り、原稿送付先 学会員による他薦の書評あるいは自薦の自著紹介で、著書名・書名・出版社名・発行年等を除いて800字以内の原稿を随時受け付けておりますので、上記の宛先にお送りください。

なお、これらの書評のうち **cahier** にも掲載するに相応しいと委員会で判断したものについては、他薦の場合は **cahier** 用に2000字程度に手直しをお願いすることがあります。また、自薦の場合は委員会で執筆者を選定して依頼します。

cahier 31

編集 研究情報委員会

発行日：2023年3月31日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL : 03-3443-6671 FAX : 03-3443-6672